

ジェフリー・サックス教授が大学生とSDGsを議論

01



コロンビア大学のジェフリー・サックス教授

昨年11月、JICAは上智大学と共催で「ジェフリー・サックス教授と語るSDGs白熱教室」を開催しました。アメリカの名門コロンビア大学のサックス教授は、世界的な経済学者であり、ベストセラー『貧困の終焉』の著者としても知られています。また、国連事務総長特別顧問として、持続可能な開発目標（SDGs）の策定にも携わりました。

会場となった上智大学には、約300人の大学生・大学院生をはじめ、民間企業、研究機関、メディアなどからも多くの方が集まりました。上智大学の暁道佳明学長の挨拶と、JICAの北岡伸一理事長の講話に続き、サックス教授が「持続可能な社会の実現に向けて若者ができること」をテーマに特別講義を行いました。講義の中で、サックス教授は、「社会に目標がなければ、未来に不安を感じたり、権力のみを追い続けたりする世の中になってしまふ。しかし、社会的公正や環境保全などの共通の目標を持つことで、安全で公平な社会に導くことができる」とSDGsの意義を説明しました。その後、参加者も交えて国際協力や



会場には大勢の参加者が集まった。留学生の姿も目立った

SDGsについて考える「白熱教室」を行いました。会場に投げ掛けられた「国益や個人の利益を追求する自国第一主義は今後も広がると思うか」という問いには、参加者の6割が「広がる」と回答。続いて、「日本は政府開発援助（ODA）を減らすべきか」という問いには、ほとんどの参加者が「減らすべきではない」と回答しました。サックス教授は、ODAは極めて重要だと主張し、「最貧国では少しのお金があるだけで、水がきれいになり、子どもたちは学校に行ける」と話しました。

セミナーの中で、サックス教授は明治維新期の日本の岩倉具視使節団を例に挙げ、他者から謙虚に学ぶことの大切さを繰り返し強調。「SDGsについてぜひ学んでほしい」と参加者に強く語りかけました。

終了後、参加者からは、「教授の国際協力に対する情熱や、研究者としての立場から語る姿に衝撃を受けた」などの感想が聞かれました。第一線で活躍する教授ならではの世界に対する危機感も伝わり、白熱したセミナーとなりました。

ニカラグアの中学生が「ラジオ体操」を披露

02



「中米スポーツ大会」でラジオ体操を披露するニカラグアの中学生たち

昨年12月に中米ニカラグアで初めて開催された「第11回中米スポーツ大会」で、JICAはニカラグア教育省などと連携し、日本の「ラジオ体操」を紹介しました。その目的は、誰でもできる手軽な運動を奨励し、一生の健康な体づくりの重点を置く日本の体育科教育のコンセプトを多くの人に知ってもらふこと。グラウンドに並んだ同国の中学生140人が、中米各国の選手団や観客を前に、スペイン語のナレーションに合わせてラジオ体操を実演しました。

開発途上国では、学校での体育科教育の遅れから、体育はレクリエーションや遊びとして捉えられています。体育を通じた保健衛生や健康教育の重要性を伝えるため、JICAは、手軽で運動効果の高いラジオ体操を活用。今回の実演に当たっては、日本のラジオ体操連盟から2人の指導員が参加し、今後、現地での指導に使うDVDの撮影も行いました。ニカラグア教育省からは、ラジオ体操は規律を守ることにもつながるため、学校での普及を目指したいとの声が上がっています。

エルサルバドルでボランティア派遣50周年記念式典

03



ボランティア派遣50周年の記念切手

今年1月、エルサルバドルでJICAボランティア派遣50周年記念式典が開かれました。エルサルバドルへは1968年に中南米地域で初めて青年海外協力隊の派遣が開始され、これまでに559人の隊員が派遣されています。

式典には、サンチェス・セレン大統領や、ウゴ・マルティネス外務大臣、樋口和喜駐エルサルバドル大使をはじめ、約300人が出席しました。サンチェス・セレン大統領はJICAのこれまでの協力に感謝の意を示し、「日本との友好関係と協力関係を永く継続させ、共に発展していける関係でありたい」と述べました。その他、初代隊員を含む協力隊OBと元教え子らが当時の思い出を振り返るトークセッションなどが行われました。

また、50周年に当たり、エルサルバドル郵便局は同国の著名な画家フェルナンド・ジョルト氏の協力で作成したロゴマークをモチーフとする記念切手を発行。式典でお披露目されました。

★記念切手を2人の方にプレゼント（詳細は38ページへ）